

自 己 評 価 書

(令和 2 年度)

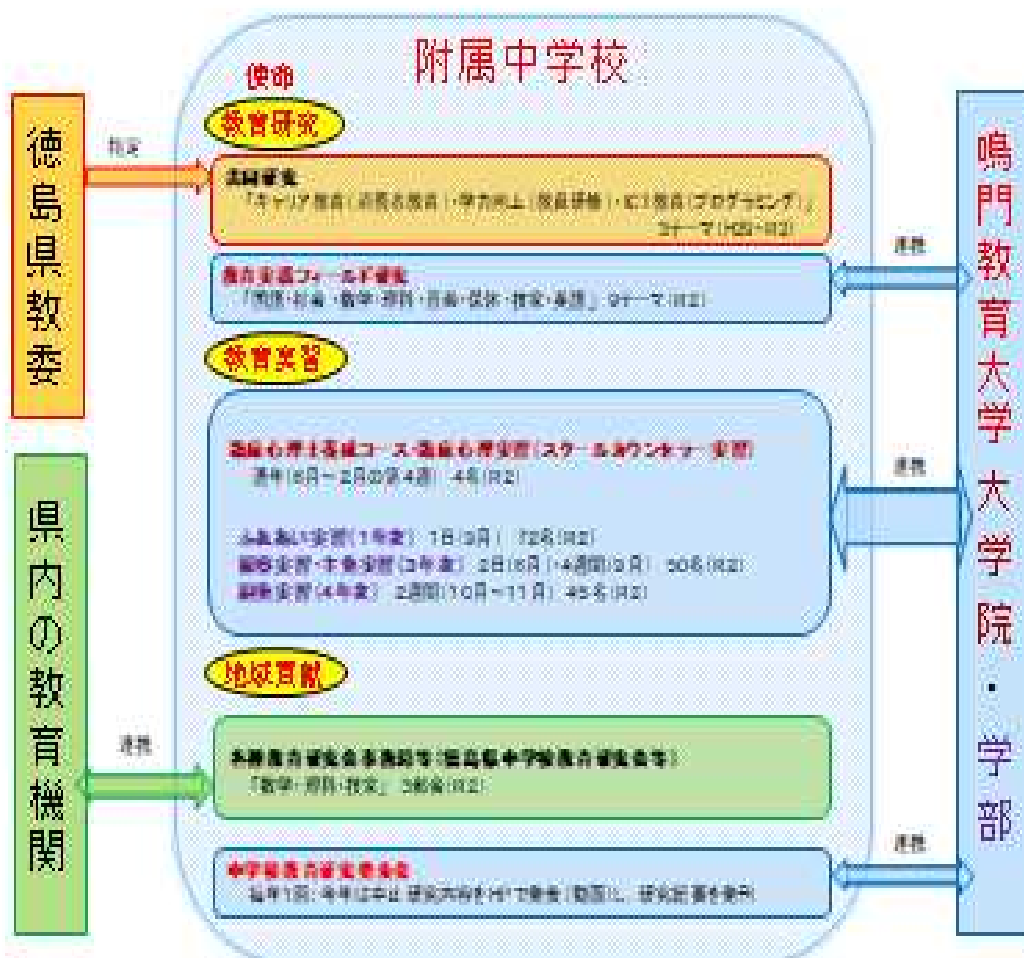
令和 3 年 3 月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	主体的・対話的で深い学びの実現	2
2	いじめの防止	7
3	基本的な生活習慣の徹底	13
III	自己評価根拠資料一覧	17

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(令和2年5月1日)
 - 生徒数 396人 教員数 25人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 優しく思いやりの心を持ち、人の気持ちのわかる生徒
- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強い意思と体をもつと共に、しなやかに生きる生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- ゆるぎない使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師
- 強い責任感をもって、何事にも丁寧な対応ができる教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学園学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 令和2年度重点目標（実践事項）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 対話的な活動を通して深い学びを実現する授業の工夫
 - イ 見方・考え方を働かせる学習指導の充実
- ② いじめの防止
 - ア 人を思いやる言動や、周りへの気配りができる集団づくり
 - イ 温もりのある居心地のよい環境づくりの推進
- ③ 基本的生活習慣の徹底
 - ア 校内で出会う全ての人への元気なあいさつの習慣付け
 - イ 時間の厳守や清掃等、決められた事が確実にできる集団づくり

(4) 令和2年度評価項目（評価指標）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 保護者対象アンケート（8月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
- ② いじめの防止
 - ア 保護者対象アンケート（8月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
- ③ 基本的生活習慣の徹底
 - ア 保護者対象アンケート（8月と2月に実施）
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 主体的・対話的で深い学びの実現

新しい中学校学習指導要領の移行も2年目となり、本校でも全面実施に向けてそれぞれの教科目標を達成すべく試行錯誤をする中で、「深い学び」の授業展開への手ごたえも徐々に感じられるようになってきた。しかしながら、予測不能な社会と言われる、子供たちがこれから生き抜いていく令和の時代に必要な、新学習指導要領が求めている「学びの質」が十分に高まっているかと言えば、まだまだ課題も多い状況が見受けられる。その予測不能な社会について、内閣府からは「Society5.0 =超スマート社会」と示されているが、そこで求められるのは文系・理系という枠を超えた課題解決能力であり、物事を多面的・多角的に捉え、自分の思いをしっかりとってそれを他者にわかりやすくプレゼンテーションできる、といった社会に生きて働く資質・能力である。

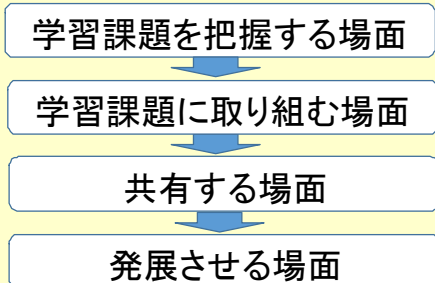
本校では、これまでの実践を踏まえ深い学びの実現に向けて、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」に着目し、それらを働かせた深い学びが全教科で共通した流れでできるように授業設計モデルを構成し、それに基づいた学習過程を通して「社会に生きて働く資質・能力の育成」につなげようとして取り組んできた。

これからの社会において、「各教科で学んだことがどのように生きて働くのか」すなわち、新学習指導要領における改定のポイントである「何ができるようになるか」を教育活動全体を通して実践できるよう、本研究を推進しながら各教科の見方・考え方を駆使して、問題解決に向かう力をしっかりと育てていければと考えている。

そのために、今回総則に規定された「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は、今までの取組を一つ一つ丁寧に見直すと共に、生徒の実態を十分に把握することとこれからの未来に必要な力を我々がしっかりと具体的に理解することが重要であるという共通認識の元に、授業設計モデルを考えた。そこでは、「学習課題を把握する場面」から始まり、「学習課題に取り組む場面」、「共有する場面」、「発展させる場面」の四つの場面で授業を構成することとし、この一連の流れを「1 サイクル」として、各場面で働く見方・考え方を明確にした。それによって、より質の高い「社会に生きて働く資質・能力」の育成につながると考え取り組んだ。

【 主体的・対話的で深い学びを実現するために取り組んだ手立ての例 】

授業設計モデルの各場面について



実践例～学習課題に取り組む場面～

社会科【学習課題】
日本は国連分担金を減らすべきだろうか。

手立て

- ・ワークシートの工夫
- ・資料の提示
- ・対話
- ・補助説明
- ・補助発問
- ・教具の工夫 など

実践例～学習課題に取り組む場面～

敵国条項をなくしてくれたら払うようにする

払わない国もあるから払わなくてもいい

減らすべきだと思う

そのままでもいいのでは？

払わない国もあるのは公正じゃない

払わないと主要国と見られない

分担金を減らすと日本の存在が薄くなる

払って日本の存在の大きさを再認識してもらおう



実践例～学習課題に取り組む場面～

考えを広げ深める「ネタ」シート

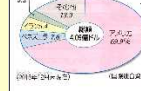
ネタ①日本国憲法前文の表記

われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある(優れていると評価されるような)地位を占めたいと思う。

名誉ある地位を保持するためには、分担金はどうすれば…?

ネタ②国連分担金を払わない国がある

国連の平和の国際的地位



ルールを守らない国がある。そのような状況で、分担金を払い続けるのって…?

ネタ③国連中心外交

…国家の安全保障などの政策を国際連合との整合性を中心に組み立てること。

授業設計モデルの各場面について

共有する場面

- ・ 思考の過程を明確にする。
- ・ 既習の知識・技能を確認する。
- ・ 本時働かせた見方・考え方を明確にする。
- ・ 新たな知識・技能を知る。
- ・ 多様な意見を取り上げ、その違いを際立たせる。
- ・ 共有したことから出てきた新たな疑問や問いを明確にする。

実践例～発展させる場面～

【共有する場面】

学習課題に取り組む場面で整理した事例をもとに、消費者の適切な選択や行動が、よりよい商品の開発や販売方法の改善につながることに気づかせる。

責任を果たすことで同様の事件や事故が起きにくくなるね。

製品がさらに改良されていくね。



実践例～発展させる場面～

確認	・ 同系統の学習課題に取り組み、定着を図る。 ・ 考えたことを実際にやってみて、確認する。 ・ 学習課題に対応した解決を自分の言葉でまとめる。
適用	・ 学習したことを用いて、別の課題について考える。 ・ 日常生活で役立てられる場面を考える。
進展	・ 次の時間に学習したいことを考える。 ・ 新たに出てきた課題について考える。
汎用	・ 今後の学習や日常に役立つように汎用的なまとめをする。
変容	・ 最初の意見と現在の意見を比較し、変容を見る。
再考	・ 最初の意見をもう一度考え直す。 ・ 自分の考え・表現を練り直す。
最適化	・ 最適解、最適策を決定する。

実践例～発展させる場面～

- ・ 100円均一のレインコートが1度の使用で破損した場合
- ・ コンビニで購入したお菓子里に異物が混入していた場合

（レインコート）の事例から（

「レインコートを買ってほしい」と、会社に、消費センターに言う。
 して、自分がどういうふうに使ったかも報告する。
 ・ 品質表示を見せると人にみる。 ・ どの国に使用しているのか分かって使
 ・ 商品をかくにんしてがら使わう。 ・ 他のお店、商品を見せよう。
 (異物から取らなくていい) ・ コンビニで使

成果

- 深い学びの視点に立った授業改善
 - ・ 授業設計モデルに基づく授業設計
 - ・ 見方・考え方働かせるための手立て
- 話し手と聞き手の立場を明確にした対話の設定

課題

- 対話を取り入れる際の時間設定
- 対話で話し合った成果を次につなげる工夫
- 学習課題に取り組む場面で取り入れる対話の検討

2 評価項目の状況

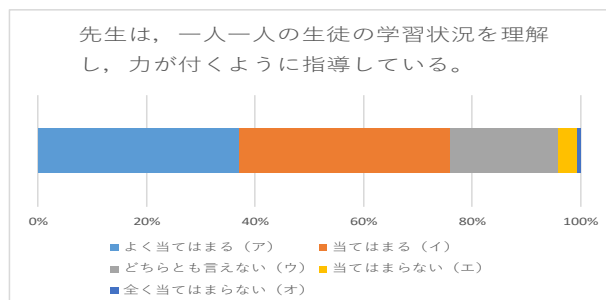
(1) 保護者対象アンケート

「先生は一人一人の生徒の学習状況を理解し、力が付くように指導している」

目標80%以上

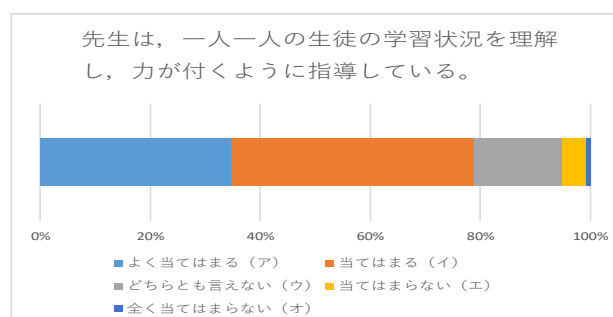
第1回（8月）76.00%（昨年度66.18%）

よく当てはまる	37.07 %
当てはまる	38.93 %
どちらとも言えない	20.00 %
当てはまらない	3.47 %
全く当てはまらない	0.53 %



第2回（2月）78.89%（昨年度72.92%）

よく当てはまる	34.72 %
当てはまる	44.17 %
どちらとも言えない	16.11 %
当てはまらない	4.17 %
全く当てはまらない	0.83 %

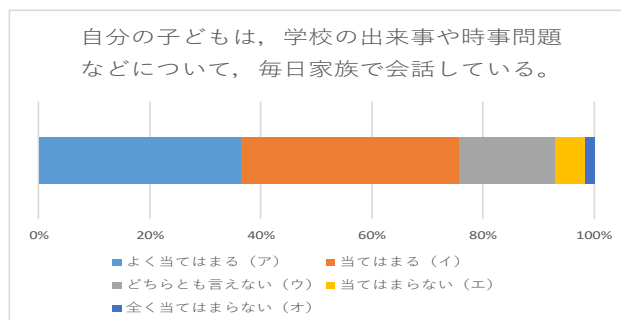


「自分の子どもは学校の出来事や時事問題などについて、毎日家族で会話している」

目標80%以上

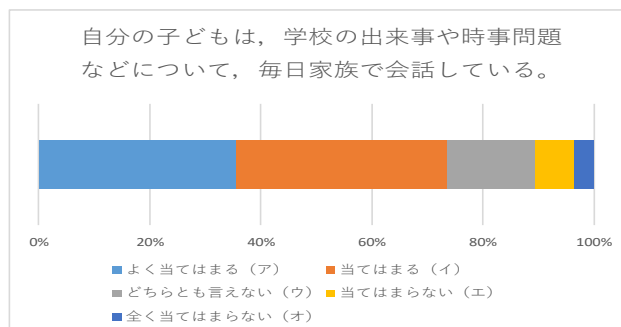
第1回（8月）75.73%（本年度から）

よく当てはまる	36.53 %
当てはまる	39.20 %
どちらとも言えない	17.33 %
当てはまらない	5.33 %
全く当てはまらない	1.60 %



第2回（2月）73.61%（本年度から）

よく当てはまる	35.56 %
当てはまる	38.06 %
どちらとも言えない	15.83 %
当てはまらない	6.94 %
全く当てはまらない	3.61 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 対話的な活動を通して、深い学びを実現する授業の工夫

当初申告	最終申告	評価
生徒の実態に応じて課題を工夫し、主体的に取り組みやすいように支援するとともに対話を通して深い学びを実現する。	生徒ごとに課題を工夫した結果、記録の伸びが見られるようになると、前向きに、仲間通しで相談しながら取り組んでいた	A
読解力の向上のために、新聞のコラムを要約する課題を毎週与え、自分の意見と友達の見解を比較検討することで、記述問題の正答率7割以上を目指す。	課題はほぼ毎週提示し、生徒の提出率も高かったが、コロナ禍の影響で、1単位時間内に十分なグループでの話し合いをして練り上げる時間が確保できなかった。記述問題の正答率は概ね達成できた。	B
読書活動を充実させ、ビブリオバトルを開催して、読書の楽しさ、面白さを伝える発進力や表現力を向上させたい。	校内のビブリオバトルは開催することができ、県大会でも発表することができたが、感染予防のため、体育館での開催となってしまう、発表者の熱量が十分届かなかった。	B
「対話的な学び」のための枠組みを考察し、「振り返り」の場面を設定することで、授業に意欲的に取り組む生徒を増やす。	感染予防のため、ペアやグループでの学習には制限を受けたが、後半は効果的に実施することができた。しかしながら、その活動を枠組みへと考察するには至らなかった。「振り返り」の設定はできた。	B
コロナ禍においても、主体的・対話的で深い学びが実現するように、発表の機会を多く与え、積極的な授業への参加を目指す。	家庭で過ごす時間が増えた分、家庭分野の授業には積極的に取り組み、実体験をもとにした発言も多かった。	A

イ 見方・考え方を働かせる学習指導の充実

当初申告	最終申告	評価
見方・考え方を働かせた授業を構想し、自ら問題発見をする場面が設定できるよう工夫する。	教科特有の見方・考え方に気付かせ、防災マップ作りに取り組めたが、もう少し思考の幅が広がる仕掛けも必要であった。	B
見方・考え方を働かせた数学科の学習指導の工夫改善を図る。	概ね実践できたが、休業期間は動画配信やプリント配布で演習に偏ってしまった。	B
単元計画を立て、見方・考え方を働かせた授業を通して確かな学力を身に付ける。	地域や時代の特色を広い視点で捉えられた様子が、ワークシートから読み取れた。	A
理科における見方・考え方を働かせる授業を通して子供の理科への興味を高める。	補助教材の活用や、教科書に掲載されていない実験等で意欲が高まった。	A
技術分野の見方・考え方が日常生活や人生の中で役立つと実感できるような授業を実践する。	見方・考え方に気付かせる授業において、生徒自ら問題を意識するようにはなったが、事後アンケートの反映が少なかった。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 新学習指導要領がいよいよ全面実施される段階となり、新しい教科書選定も終わり、これからの社会に生きる子供たちに必要な力を付けるために、より授業実践を充実させようと思った矢先の2ヶ月近い休業措置により、教育課程の完全履修が可能かどうかの不安が当初は大きかった。しかしながら、夏期休業期間における登校日などで普段以上に、教員も子供も真剣に取り組み、概ね評価項目が達成できたことは、このようなだれも経験したことのない状況の中ではよく努力できた方だと思う。それもこれも、真夏の本来なら授業に適さない状況だから長期休業になっている中で、新型コロナウイルスだけでなく、熱中症にも配慮しながら日々努力し、大きな学力低下も招かなかった子供とそれを支えた家庭の努力の賜であると感じている。
- 今回の新型コロナウイルスによる感染拡大が、社会や学校生活を変えたように、これから自分たちが生きていく社会は「予測不能な社会」であるということをもつて子供も我々も実感でき、それ故、これから必要となる学力は、暗記して多くのことを覚えることでなく、新学習指導要領が示すように、「主体的・対話的で深い学び」を通して育まれることを共通理解して授業に取り組めたことが目標達成へ向けた原動力となった。
- 対話活動は、感染予防の観点から、授業再開当初はスムーズにできなかったが、ホワイトボードの活用や、教師がハンズフリーマイクを装着して、授業を進めるなど、それぞれの環境に応じた対応をしようと、「ピンチをチャンスに変える」意識が芽生え、多くの工夫を凝らした活動ができ、大きな声が出せない学校生活の中にも活気が感じられた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 研究発表会が中止になったため、十分な成果と課題の集約ができないまま、次の研究がスタートしたので、対話活動は今後も引き続き、様々なアプローチを重ねていく必要がある。
- 感染予防や熱中症対策を乗り越えながら、授業を進めることとなったため、それらの点での同じ教科の教員同士、また他教科間での話し合う時間が多く見られたが、新学習指導要領全面実施を直前に控え、深い学びに直結する授業改善への相談をする時間が十分確保できなかった。来年度は、タブレットパソコンを利用することで、机間巡視やグループごとの発表における大幅な時間短縮が見込まれるので、その時間をいかに有効に活用するか、今から検討してICT機器の有効かつ効果的な利用を目指したい。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 2 いじめの防止

いじめ問題については、本校においては昨年度のケースを全教職員が肝に銘じ、生徒一人一人にしっかりと寄り添い、丁寧な観察と支援を心がけると新学期を前に確認しあって令和2年度を迎えた。

しかしながら、2、3年生は始業式を終えた翌日から、新入生は入学式の翌日から5月末まで2ヶ月近い休業措置で新年度はスタートした。リモートで各自と授業ができる準備が整っていなかったため、毎週2回ほど、担任が電話連絡をして子供たちの様子を聞いたり不安なことはないかを確認した。新しい担任と1日しか合っていない子供たちは、部活動も全面中止となりさぞかし不安は大きかったものと思われる。また、学校が再開された5月下旬からも「分散登校」となり、午前、午後で半分の生徒しか登校できず、校区の広い本校は、午前と午後の登校を1週間ごとに交代したものの、バスや列車の時間に合わせた時間割など、苦勞も多かった。また教員も午前、午後と同じ授業を行うため、同一授業の時数は2倍となり、負担もあった。1年生においては、附属小学校から進学してきた生徒と、他の小学校から進学してきた生徒が出会う最初の1～2ヶ月は、新入生歓迎音楽会等の行事を通して、緊張感をほぐし、仲間作りを進めるのが例年の1年生であったが、徐々に登校しても「ソーシャルディスタンス」の徹底で、なかなか打ち解ける機会もなく、心配もしたが、大きなトラブルもなく徐々に学校生活に親しみ、クラスの団結もできてきた。

そのような中、マスクをしていて表情が十分にわからない子供たちの中に、辛い思いをしているものはないか、こまめな観察と、学校生活アンケート等によっていじめの撲滅に向けて取り組んできた。また、生活記録をどのクラスも毎日90パーセント以上提出できるようにし、日々、小さな子供からの声を拾い上げ、問題が生じた時はその日のうちに関係者から丁寧な聞き取りを行い、短期間での問題解決に努めてきた。そして、毎月「生徒指導委員会」を開催し、各学年の状況を出し合い、問題の共通理解に努め、学校全体での早期解決を心がけた。

「3密」の徹底が毎週のように通知され、子供たちにとっては、おおよそ学校生活には最も不似合いな「ソーシャルディスタンス」が強いられた。本校ではあえて、距離を開ける必要性から「フィジカルディスタンス」は大事にして、気持ちの上では子供たちに対して「ソーシャルボンド」で接することを確認しあった。また、日常でのマスクが当たり前となり、教師の表情も笑っているのか、怒っているのか解り辛くなったので、大きなアクションで子供たちにしっかり気持ちを伝えることを心がけた。そして特別教室など広い教室では、ハンズフリーマイクを装着して子供たちに教師の声を届けやすくする工夫も行った。

担任にとって、いじめのない安心・安全な学級作り、そしてクラスの団結力を高めることは最も大切でそして早急に求められる事柄である。そのための最も大きなキーワードは「学校行事」である。それが、ことごとく中止や延期の方向に流れていく中、本校では我慢と辛抱を日々強いられてストレスがたまっているであろう、子供たちのためになんとか、安心・安全を最優先に実施できないか考えた。文化祭においては、本校の半分くらいの規模以上の周辺の中学校は、全校生徒が体育館に入れなかったことからすべて中止になったようであった。体育祭にしても学年ごとに運動場に出て2時間ずつの開催、保護者には非公開という中学校がほとんどであった。本校では、3年生の特権として、文化祭で各クラスが劇をしてダンスができるという伝統を心待ちにしていた3年生に何とかその夢を叶えられるようにしたかった。何しろ入学以来頑張ってきた部活動の最後の総合体育大会やコンクールが全て中止になった3年生に、せめて文化祭だけでも、という思いは本校教職員の総意となった。そこで、3年生のみを体育館に入れて、体育館いっぱいに広がって着席し、舞台での劇やダンスはフェイスガードを全員装着して実施した。そして、音声はすべて、舞台袖からのアフレコとした。従ってステージで演技している生徒もクラス全員で踊るダンスの時もフェイスガードを装着しているものの、声を発することはなかった。1年生、2年

生には、体育館から100mのケーブルを引っ張って、教室へハイビジョン中継した。ネットによるリモート配信と違って、映像が鮮明で演技が終わるたび教室から大きな拍手が聞こえてきた。3年生の保護者にはクラス全員が踊っているダンスの様子をDVDとして届けた。そして、体育祭では、生徒同士が体を接してするような競技ができなかったため、競技数は限定されたものの改装されたばかりの徳島市立陸上競技場を半日貸し切って実施することができた。広大な芝生席があるので、保護者も見学OKとしたところ、300人近く来ていたようであるが、全く密状態ではなかった。9月のはじめだったので、熱中症対策にテントも7～8張りレンタルし、無事実施できた。子供たちは、何でも「中止」となる世の中の状況に慣れてきたのか、このような例年とは違う内容の実施でも、大変喜び、うれしかった様子が、感想文から伺われた。

様々な行事を「感染予防の観点から中止」というのは、世の中の流れから、賛同を得やすく簡単ではあったが、こういうときこそ知恵を絞るべきで、「ピンチをチャンス」に変えなければならない。何もかもが中止になる中で、本校は初めて実施した行事が本年度あった。プロの劇団員による演劇を全校生徒で鑑賞する「観劇」である。東京の劇団員、体育館に全校生徒は入れない、それだけで即、中止になりそうなものであるが何とか実施できないか、ギリギリまで模索した。劇団によると、本年度予定していた公演は、よほどの小規模校以外は、多くが中止か次年度へ延期になった、とのことであった。そのような中、近所の徳島県教育会館の大ホールを貸し切って実施した。隣の席を空けて全校生徒が着席でき、劇団員もスタッフを含めた全員がPCR検査を受けて見事な劇を鑑賞することができた。このことは、本校の生徒はもちろんのこと、劇団員の方も感激して後日、何度もメッセージを送ってくださった。

最も学級作りに懸念があったのは1年生であるが、大きな行事であった登山を含む宿泊活動が中止になったものの、中型バス8台（一人ずつ座席を使うため）を連ねて、剣山登山に向かい、一気にクラスの団結が強まった。このような中で、今年は全校で長期欠席者0で日々学校生活を送れている。ただし、学校生活アンケートでも、人のいやがる発言を平気とする生徒も見られ、油断することなく、子供たちの生活に目を配っていく所存である。

【分散登校の様子】



(分散登校期間中の授業風景)



(手洗い励行に向けて蛇口を増設)



(休業期間中の教職員による清掃活動)



(授業終了後の教室の消毒)

【学校行事の様子】



(文化祭での3年生のダンス[各クラス全員が参加])



(文化祭は3年生は体育館, 他学年はリモートで見学)



(田宮陸上競技場での体育祭)



(体育祭での熱中症対策)



(1年生の剣山への校外学習)



(劇団「風」による『ヘレン・ケラー』の観劇)

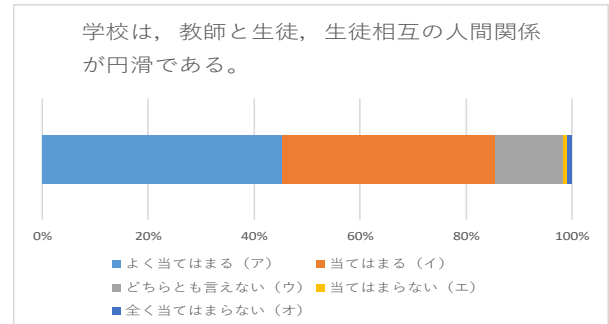
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「学校は、教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である」 目標80%以上

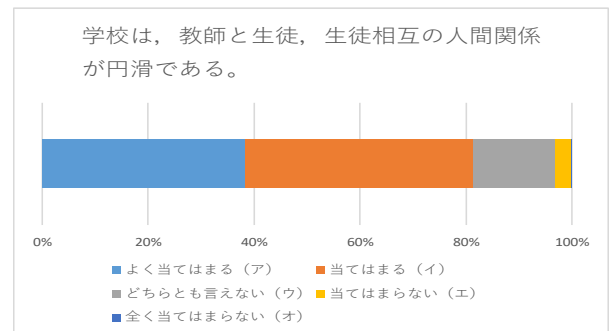
第1回（8月）85.64%（昨年度80.75%）

よく当てはまる	45.21 %
当てはまる	40.43 %
どちらとも言えない	12.77 %
当てはまらない	0.80 %
全く当てはまらない	0.80 %



第2回（2月）81.39%（昨年度80.97%）

よく当てはまる	38.33 %
当てはまる	43.06 %
どちらとも言えない	15.56 %
当てはまらない	2.78 %
全く当てはまらない	0.28 %

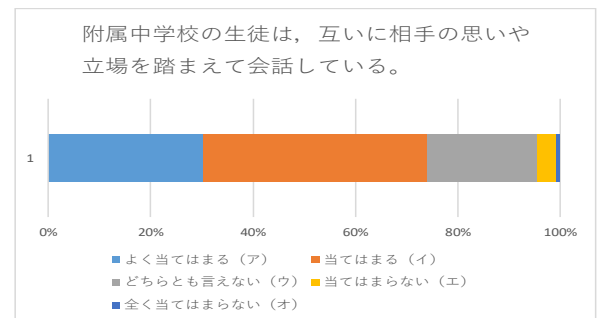


「附属中学校の生徒は、互いに相手の思いや立場を踏まえて会話している」

目標80%以上

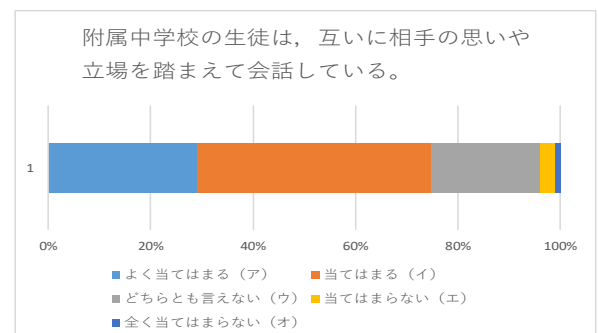
第1回（8月）73.87%（本年度から）

よく当てはまる	30.40 %
当てはまる	43.47 %
どちらとも言えない	21.60 %
当てはまらない	3.73 %
全く当てはまらない	0.80 %



第2回（2月）74.72%（本年度から）

よく当てはまる	29.17 %
当てはまる	45.56 %
どちらとも言えない	21.39 %
当てはまらない	2.78 %
全く当てはまらない	1.11 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 人を思いやる言動や、周りへの気配りができる集団づくり

当初申告	最終申告	評価
休み時間等の対話を通して、他人を思いやる気持ちに気付かせるように心がけ、さりげなく気配りができる集団を目指す。	生徒との対話を心がけたが、昼食時などは感染予防のため、会話が厳禁となり例年より対話による関係作りに時間を要した。	B
学級通信を月に複数回発行し、クラスの現状や気が付いたクラスメートのちょっとした優しさや気遣いを紹介することで、人への思いやりの心を育てたい。	1週間に一度のペースで学級通信を発行することができ、知らなかったクラスメートの気遣いや優しさに気付け、受検が近づいてもギスギスしたムードがなかった。	A
道徳・人権教育の授業を毎回、学年団で話し合い、実践することで友への優しい気配りができる温かい学年集団を目指す。	道徳は、事前の話し合いができ、他者を思いやる言動をする生徒が増えたが人権教育の授業時数が十分に確保できなかった。	B
学級担任とは違った立場で、生徒に声をかけ、道徳心や人権意識を高めたい。	授業準備に時間が取られることが多く、1年生を中心にしかできなかった。	B
最終学年として、人を思いやる気持ちの重要性を学校生活全般を通して伝える。	卒業後も意識させるような問題を取り上げてきたが、もう少し時間をかけたかった。	B

イ 温もりの有る居心地のよい環境づくりの推進

当初申告	最終申告	評価
一人一人の気持ちに寄り添い、対話を大切にすることで、いじめを許さない居心地の良い環境を心がける。	毎朝、早く教室に行き生徒に一言声をかけることができた。生活記録に悩みや不安を率直に書いてくる生徒が増えた。	B
居心地のよい教室にするためのポイントを子供と共に考え、それを掲示して定期的に振り返る時間を作って意識させる。教室環境も子供にとって安らぐ雰囲気になりたい。	振り返りシートへの記入を毎週実施してきて、その集計結果からの気付きを学級通信に書いたり、毎朝小黒板に温かみのあるメッセージを書いて子供を迎えた。	A
生徒が安心して学校生活が送れるように、毎朝7時30分から正門通りに立って、挨拶をしながら子供たちと会話を交わす。	毎日の挨拶は励行でき、挨拶だけでなく様々な相談をしてくる生徒もいたが、一部の生徒に偏りが出てしまった部分もある。	B
教室の背面黒板に温かい言葉を書き、その言葉に添える絵も毎月変えていき、子供たちにとって安心できる教室環境を整える。	背面黒板は予定通り実施できた。生徒が前向きになる言葉も添えたりしたが子供たちにも関わらせる工夫もするべきだった。	B
温かい雰囲気に満ちた学級をつくるために、教師と生徒、生徒同士の信頼関係を高めていけるよう、教室等の環境づくりも常に意識して取り組む。	常に子供たちに声をかける中で、毎日3人くらいのペースで休み時間に時間をとって話を聞くことを続けた。各自の誕生日をみんなで祝う場も帰り学活に設けた。	A

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 新学期早々の2ヶ月近い休業措置で、学級作りがうまくいくか大変心配であったが、担任の細やかな電話連絡やメッセージの送付で、新しい学校生活にも慣れ、順調なスタートが切れ、ここ数年間で徐々に全校で長期欠席（年間30日以上）者が0である。
- いじめ防止担当者を配置して、小学校へ毎週金曜日にT2として出向き、児童の実態把握と共に、小中連携の強化に取り組んだ。今年の6年生は多様な生徒が多く、保健体育科の教員が交代で出向き、生徒指導面でも効果があった。担当者の制度が今年度までの予定でスタートしているが、この成果と課題から是非来年度以降も継続を強く希望したい。
- コロナ禍で子供同士が近付いて話をする場面を制限しなくてはいけないというのは、じくじたる思いであったが、その分、生活記録や学級便りを通して、温もりのある学級づくりに教員が一丸となって取り組むことができた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 新型コロナの感染拡大防止のため、学校生活の中でいままでになかった配慮事項が増え、新しい学校生活に変化していく中で、どうしても消毒や3密防止に時間をとられ、子供たちとの関わりが減ってしまいがちになった。時間を工夫して、「ソーシャルディスタンス」とは言っても、物理的な距離は気にしながらも、気持ちはしっかりと寄り添っているという思いを子供と共に一層共有していく必要があると感じている。
- 休業措置の影響もあり、各教科の進度が優先されるあまり、人権教育の時間が十分に確保できなかった。新型コロナに対する偏見やそれに従事してくれている方々への思いについては全校でも時間をとって取り組んだが、年間の予定していた人権教育の時間が十分確保できなかった。1、2年生については次年度、しっかりと取り組む予定である。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 基本的な生活習慣の徹底

あいさつができる，人の話が聞ける，時間が守れる，といった基本的な生活習慣がきちんとしてできることの重要性。あたりまえのことをあたりまえにできる，といったことが学校生活の基本であり，それができたうえでの仲間づくりであることを意識して生活しようということを学校再開後，あらゆる機会を通して伝えてきた。あいさつの大切さ，1日があいさつで気持ちよく始めたい，という思いを共有して朝は，さわやかなあいさつを心がけるように，教職員も積極的に子供たちにあいさつをした。校内で出会う，外来者も含めたすべての人にも積極的にあいさつができるよう全校に呼びかけた。

人の話が聞ける，というのは授業中に限らず，不十分な場面が多かった。そのことの重要性をしっかりと担任を中心に子供たちに語ってもらった。話を聞き逃してしまったばかりに，どれだけ損をしてしまうかということ，また人にも迷惑をかけてしまうというのを，早く気付いて直していってもらいたいという思いから，学校生活のなかで，そのような場面がないか，確認し合った。

時間を守ることについては，朝の登校はもちろん，授業においても5分前着席の徹底を呼びかけた。小学生の時からいわれている内容であるが，義務教育最終となる中学校時代に，このような基本的な生活習慣が付いているか否かは今後の人生に大きく影響するといっても過言ではないし，自分の生活を顧みてそれら，あたりまえのことが「きちんとできる」ように仲間同士で声をかけながら自分を律しながら正していくのは，中学生時代というのは最後のチャンスかもしれない。自分に厳しく，基本的な生活習慣をしっかりと見直してもらいたい。

清掃活動は，今年はコロナ禍の中，学校再開時は消毒もしなければならない箇所も多く，時間もかかり，大変であった。しかしながら，「清掃は心を磨く活動でもある」と言われるように，しっかりと清掃活動に取り組める姿勢は学校生活において貴重である。教師が毎日，共に活動し，母校愛を育みながら，古い校舎内外を毎日美しくしたい，汚さないという思いも醸成したい。



(登校風景と挨拶運動)



(学年集会の様子)



(体育の授業の様子)



(毎日の清掃活動)

2 評価項目の状況

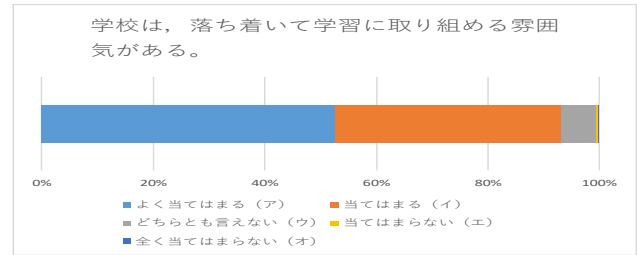
(1) 保護者対象アンケート

「学校は、落ち着いて学習に取り組める雰囲気がある」

目標80%以上

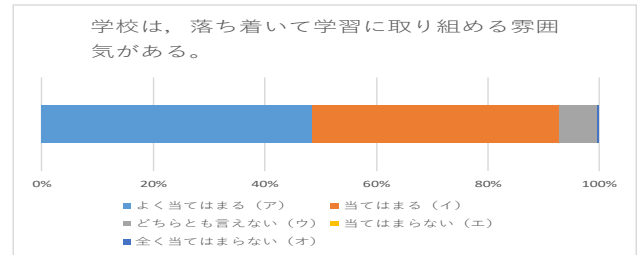
第1回（8月）93.09%（本年度から）

よく当てはまる	52.66 %
当てはまる	40.43 %
どちらとも言えない	12.77 %
当てはまらない	0.80 %
全く当てはまらない	0.80 %



第2回（2月）92.78%（本年度から）

よく当てはまる	48.33 %
当てはまる	44.44 %
どちらとも言えない	6.94 %
当てはまらない	0.00 %
全く当てはまらない	0.28 %

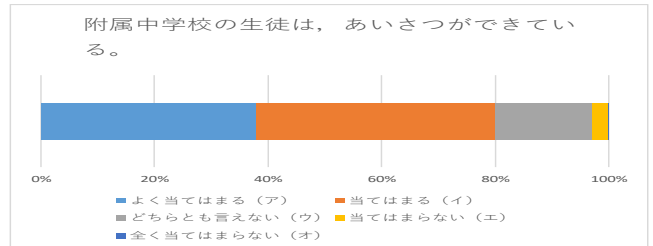


「附属中学校の生徒は、あいさつができています」

目標80%以上

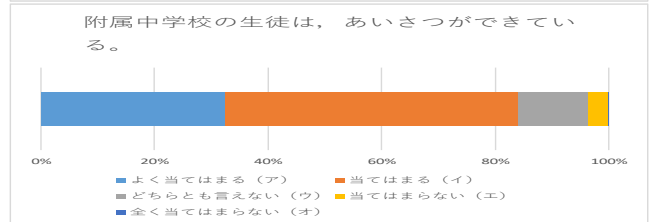
第1回（8月）80.00%（本年度から）

よく当てはまる	37.87 %
当てはまる	42.13 %
どちらとも言えない	17.07 %
当てはまらない	2.67 %
全く当てはまらない	0.27 %



第2回（2月）83.89%（本年度から）

よく当てはまる	32.50 %
当てはまる	51.39 %
どちらとも言えない	12.50 %
当てはまらない	3.33 %
全く当てはまらない	0.28 %

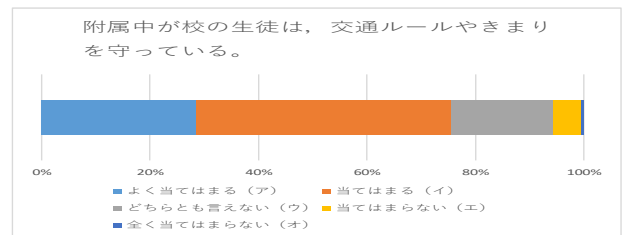


「附属中学校の生徒は、交通ルールやきまりを守っている」

目標80%以上

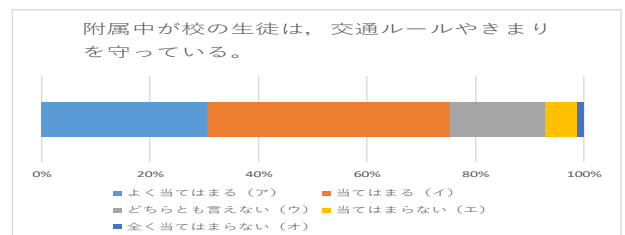
第1回（8月）75.47%（本年度から）

よく当てはまる	28.53 %
当てはまる	46.93 %
どちらとも言えない	18.93 %
当てはまらない	5.07 %
全く当てはまらない	0.53 %



第2回（2月）75.28%（本年度から）

よく当てはまる	30.56 %
当てはまる	44.72 %
どちらとも言えない	17.50 %
当てはまらない	6.11 %
全く当てはまらない	1.11 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 校内で出会う全ての人への元気なあいさつの習慣付け

当初申告	最終申告	評価
あいさつを徹底し、1日が気持ちよくスタートできるように、クラス全員に意識付けを行う。	毎月振り返りをして、目標達成を目指したが、朝のあいさつは向上したものの、校内でのあいさつは十分ではなかった。	B
人の目を見て、自分からすすんであいさつができる習慣を身に付けさせる。	こちらから、あいさつをすればみんな同じように返すことができるが、自分から進んでできない生徒もまだ少し見られた。	B
さわやかなあいさつを推進し、校内ですれ違う先生にも挨拶ができるよう取り組み、あいさつと笑顔のあふれる学級を目指す。	夏以降、朝や校内でのあいさつは、ずいぶんできるようになってきたものの、日頃交流の少ない他学年の先生には、十分でなかったという意見が多かった。	B

イ 時間の厳守や清掃等、決められた事が確実にできる集団づくり

当初申告	最終申告	評価
時間を厳守して、早く分担場所に出向き、時間いっぱい、ていねいに清掃ができる集団を育成する。	教室以外の掃除場所に行くのが、段々と遅くなる傾向が見られ、その都度声を掛けあってきたが、後期になって素早く丁寧に掃除に取りかけられる生徒が増えてきた。	A
清掃活動を大切にすることで、生徒の心の成長を促したい。やらされている意識から、自分たちの学校を美しく保ちたいという前向きな気持ちで取り組ませたい。	当初は清掃活動への取り組みが消極的な生徒が目立ったが、なぜ清掃活動が大切かということを学級目標と照らし合わせながら生徒と一緒に考える機会を設け、段々と改善が見られた。	B
美しい環境を保つことが、子供たちが安心・安全に学校生活を送る基本であることを生徒と共に常に考えながら、清掃活動にも積極的に取り組ませたい。	コロナ禍の影響で、学校再開当時は清掃の前後も手洗い、手指消毒が徹底されていたが、段々と慣れてきて意識が薄れてきた感があったが、清掃には時間内よく取り組めた。	B
5分前着席を意識し、授業準備を早くして、授業の取りかかりに遅れないようにさせる。特に特別教室の移動など、先を見通して動けるようにする。	授業の終わり時間の関係で、遅れそうなときや、トラブルで間に合わないときは、友達同士で声を掛け合い、リカバリーするなどし、授業開始に遅れてしまうことは、ほぼ無かった。	A

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 生徒会の幟を持つての毎朝の挨拶運動の成果もあって、朝のあいさつができる生徒が格段に増えてきた。教室に入る際も、自分からすすんであいさつのできる生徒が多くなり、さわやかなあいさつにより気持ちのよい1日のスタートとなることを実感できる雰囲気広がってきた。
- 限られた時間内の清掃活動ではあるが、チャイムが鳴ったら清掃場所に早く行き着く生徒が増えてきた。学校再開当初は、消毒の作業も伴い日々大変であったが、生徒も清掃の大切さを実感しつつ、前向きに取り組む生徒が増えてきた。以前は、清掃中に話ばかりする生徒も目立ったが、マスクの影響と3密を意識してか、話し込んで掃除をしていない生徒は随分減少した。
- 時間の厳守、人の話を聞く、という点においては、子供たちに常に話してきた結果、ほとんどの生徒が実行できるようになった。

(2) 改善を要する点（課題）

- 朝のあいさつや、校内でのあいさつは大分できるようになったものの、関わりの少ない先生や来校者の方にはまだ十分とは言えなかった。
- 清掃活動への取組は、コロナ禍も影響してか、前向きに取り組める生徒が増えたが、まだ、させられているという感じの生徒も見られる。より美しく、工夫した取組ができるように意識を向上させたい。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

Ⅲ 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	添付	別添	資料名	備考
1	1・2・3	参考資料1	○		令和2年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	
2	1・2・3	参考資料2		○	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	2	参考資料3		○	令和2年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
4	1・2・3	参考資料4		○	令和2年度オープンスクールアンケート 結果	資料回収